

点描

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No.15

1987
昭和62年

2009年、真宗本廟報恩講にて門徒感話に立つ小石川武美氏

北海道「開教」百年

真宗本廟でアイヌ民族差別を提起

一九八六年(昭和61)、中曽根首相の「日本は単一民族国家である」「差別を受けている少数民族は日本にはいない」等の発言に対し、北海道教区同和協議会は、宗務総長宛に要請書を提出した。

首相の発言は、共同体信仰を背景とした私たちの差別体質を象徴的に表したものであると位置づけ、宗務当局に対し、首相の差別発言撤回・謝罪とともに、「北海道開教とは何か」「アイヌ差別の問題に取り組む」ことを要請している。

*

宗派がアイヌ民族差別問題を問われたのは、一九七七年(昭和52)の大師堂爆破事件であった。

決行声明に対して、真宗教学研究会所声明を公表し、教学会議・調査団の北海道派遣も行われた。また、萱野茂氏を講師とした「アイヌ問題特別講座」を開催。その後もアイヌ民族儀式への参加をはじめ、交流や聞き取りなどが進められた。

北海道教区同和協議会は、「寝た子を起こすな」との批判を受けつつも活動を継続したが、この問題が全宗門的課題となつて展開を見せることはなかったと言える。

このような状況下、中曽根発言が惹起。翌一九八七年(昭和62)、同和推進本部は「同和共学研修会」を開催した。テーマは「人間が人間であるために―教団の非違の歴史を直視し、宗祖親鸞聖人の教えに帰る―」。講師は泉恵機同和推進本部委員(現解放運動推進本部)とともに、北海道ウタリ協会(現北海道アイヌ協会)の野村義一理事長が務め、正面からアイヌ民族差別問題が提起された。

この研修会では、発題者として石井由治氏(北海道ウタリ協会札幌前支部長)のほか、小石川武美氏(第八組本念寺門徒)、藤田光代氏(第四組照願寺)が立たれた。

講義は、日本仏教の本質が異民族に対しては精神侵略であることや、アイヌ同化政策によつて土地、言葉、生産手段、文化、信仰が奪われたこと、今なお起こる就職、結婚差別、学校や病院での差別の現実が示された。

*

さて、先の真宗門徒・小石川氏はアイヌ民族である。氏は地元の開町七十年を記念した碑文に、誇るべきアイヌの歴史を刻んだ。

「明治の初期頃より政府の手による北海道の開拓が進められるに伴い穂別にも和人が鹿道を辿つて入地した。しかしながらその不安と困難は筆舌につくし難いものがあった。われわれの先祖は和人に多くの支援と利便を供与し、風俗習慣を異にしながらも共にその開拓に血と汗の斧をふるつたのである。」(穂別町。文は抜粋)

この碑文に触れた本念寺住職の金崎勝利氏は、「和人は北海道の自然の中で生きる術を知らなかった。生きる知恵はアイヌから教えてもらった。真宗は知恩報徳を言うが、その恩を裏切つて今日があるのではないか」と思い至り、小石川氏を訪ねたという。

この出会いによつて真宗門徒の自覚を深めた小石川氏は、以後もアイヌ民族の運動に深く関わるが、それは「専ら南無阿弥陀仏の教えからやってきた」と述べる。「開教」を問い直す営為は、人を通して深められていった。

(速水馨)